

源語初音の表現構成

——終助詞「かし」による文末規定——

西 田 隆 政

はじめに

源氏物語を五十四帖からなる長編物語とするならば、それを構成する各巻相互の関係が検討されなければならぬ。文学作品を読み解くにあたっては、いかに作られたかではなく、いかに作られているかを究明する必要があると、思量するからである。

この小論で取り上げる、初音の巻は、源氏物語中で、第二十三番の巻にあたり、玉鬘の並びの巻九帖の首巻であり、その表現の特性については、諸家により数々の指摘がなされている。例示するならば、登場する女性達の個性が精妙に書き分けられていることや、巻冒頭よりの引き歌の駆使、女性の頭髮の描写、巻の終わりの男踏歌への詳細な書き込み等が挙げられているのである。⁽¹⁾

さらに、この巻においては、その表現構成についても特性が存するようである。即ち、初音の巻は、物語の地の文中では使用されることの少ない、終助詞「かし」が文末表現に多用され、その「かし」の文末表現のある文がこ

源語初音の表現構成

の巻の表現構成を荷担していると考えられるのである。

以下、この小論では、「かし」の文末表現に着目して、初音の巻の表現構成を検討することにした。

一

まず基礎作業として、源氏物語五十四帖の全編についてその地の文における文の数を算定し、さらに、その文末表現についても、調査を行った。テキストには、朝日新聞社刊の日本古典全書源氏物語全七巻を使用した。⁽²⁾

その結果、源氏物語五十四帖には、総計一一、二七一の文が算定された。そして、その中における、「かし」による文末表現のある文は、一〇七文が存するのみである。全体の僅か〇、九五％に過ぎない。それが、初音の巻では、全一一六文中に七文も存在する。これは、巻全文中の六、〇％にもあたり、期待値の六倍以上にもなる。そして、他の巻々では、若菜の上巻には一一文存在するのであるが、全五二七文中では二、一％であり、次いでは、帚木の巻の七文、全三一六文中の二、一％が見られるのみである。この点からするならば、初音の巻の「かし」の数値は、非常に高いものであることが理解される。

また、それ以上に注意せられるのは、初音の巻では巻の冒頭文と巻末文がともに「かし」の文末表現を持っていることである。これは、源氏物語中、初音の巻のみで、他には、次の資料一と二に挙げた、冒頭のみにある朝顔の巻と、巻末のみにある常夏の巻が指摘されるだけである。先の数値に併せて、このことも、初音の巻を考えるにあたって、「かし」を重視せねばならない、一証となるであろう。

〔資料一〕齋院は、御服にて下り居給ひにきかし。(朝顔。第一文)

〔資料二〕御対面の程、さし過したることもあらむかし。(常夏。第一〇七文)

ところで、源氏物語の地の文中では、一般に、終助詞「かし」はどのように用いられているのであろうか。夕顔の巻の例、資料三より考えてみたい。

〔資料三〕隣の家々、あやしき賤の男の声々、目さまして、「あはれ、いと寒しや。今年こそなりはひにも頼む所少く、田舎の通も思ひかけねば、いと心細けれ。北殿こそ、聞き給ふや」など言ひ交すも聞ゆ。いとあはれなるおのがじしの営みに、起き出でてそそめき騒ぐも程なきを、女いとはづかしく思ひたり。えんだち気色ばまむ人は、消えも入りぬべき住のさまなめりかし。されどのどかに、つらき憂きもかたはらいたきことも、思ひ入れたる様ならで、わがもてなし有様は、いとあてはかに見めかしくて、またなくらうがはしき隣の用意なさを、いかなる事とも聞き知りたる様ならねば、なかなか恥ぢかがやかむよりは、罪ゆるされてぞ見えける。

(夕顔。第九一文・九二文・九三文・九四文)

これは、源氏が夕顔の屋敷に泊まった、翌朝の場面である。市井の陋屋故、隣の家々から身分賤しい者どもの声が聞こえてくる。そして、それを夕顔は恥ぢかしく思うが、源氏は彼女の上品な態度から、逆に罪が許されるのである。ここでは、えんだち云々とある、第九三文に「かし」の文末表現がなされている。体裁ぶって気取るような人ならば、恥ぢかしさに耐えられないような住居の様子という内容の文であるが、この文は、第九二文と第九四文との間の挿入表現として存在していると考えられる。文脈は、恥ぢかしく思っている、そうではあるが、あまり深く気にとめていない云々と続いている。それに対して、第九三文は、気取る人ならばと、挿入表現として補足的に説明することにより、この部分に重層的な表現を成立させているのである。

源語初音の表現構成

源氏物語における、多くの「かし」はこのようなものと理解される。また、この例で今一つ注目されるのは、第九三文は「ぞ見えける」と「けり」の文末表現のある第九四文に続いていることである。地の文では、「かし」の文末表現のある文も「けり」の文によって包摂されることが看取される。つまり、源氏物語の地の文中の「かし」は、挿入表現としての機能を持ち、その内容も物語の文脈自体を担うものではなく、あくまでもそれを補う存在で、基本的には物語を構成する「けり」の文脈によって包みこまれてしまうものなのである。

しかし、翻って初音の巻の「かし」を見るならば、これはそのような一般傾向とは相違するようである。初音の巻では、「かし」の文末表現のある文が巻構成の軸を成していると考えられる。冒頭文と巻末文とに「かし」のあるのが、そのもっとも大きな徴表であるが、以下に示すように、初音の巻を構成する七つの基本段落が、それぞれ、「かし」の文末規定のある文によって区画されていると看做しうるのである。

一一

初音の巻は、七つの「かし」によって区画された基本段落によって構成されている。そして、その第一次構成の段落は、大きく三つに区分することができる。ここでは、それぞれ、序章、展開、終章と位置付けた。

Ⅰ序章（新春六条院） 第一文 ～ 第二文

Ⅱ展開

一 六条院

1 春殿の御前―補足段落 第三文 ～ 第二五文

2 夏の御住居

第二六文～第三八文

3 明石の御方―補足段落

第三九文～第六六文

二 二条院東院

1 東院と末摘

第六七文～第七七文

2 末摘と空蟬―補足段落

第七八文～第九四文

Ⅲ 終章（六条院栄華）

第九五文～第一一六文

序章は、新春のめでたき折が述べられ、取り分け、六条院の御前における、それは格別なものとして、これよりの六条院での栄華の有り様を叙述する、導入部を成している。

展開は、その栄華の有様が女性達の屋敷町毎に述べられている。それも、前半三段落が六条院、後半二段落が二条東院となっており、それぞれの段落では、女性達の人柄や源氏との関係が描かれている。

終章では、男踏歌の行事を通して、六条院栄華の最高の場面が描写される。序章で新春の折が規定され、その具体的な有様が女性達を巡る中で描かれ、最後に終章で、今一度、六条院の栄華が再確認されるわけである。以下、具体的に、それぞれの段落の構成を見ていく。一八頁以下の、初音の巻の表現構成資料を参照されたい。

まず、序章の「新春六条院」は、第一文と第二文の二つの文によって構成されている。冒頭文に「かし」の文末表現がなされているが、第二文には存在しない。しかし、この場合は、世間一般を「見ゆるかし」と述べた後で「まして」玉の台の六条院であるならばいかにとある故に、冒頭文の「かし」によって包摂されている一文と看做すことが可能である。

源語初音の表現構成

次に、展開部であるが、最初に紫上の住む「春殿の御殿」が描かれる。六条院中でも、もっとも華やかなる春の御殿である。第三文から第二五文までの二三文で構成されている。ただ、この段落の場合、「かし」が段落を区画する位置にはないようにも見える。第一九文に「かし」の文末表現があるが、この後も第二五文まで春の御殿での話が続くのである。しかし、さらに細かく見ていくならば、ここでの第二〇文以降は、補足の段落と見ることが可能なのである。明石の方から明石の姫君への贈歌とそれへの姫君の返歌がこの補足部分には書かれている。この段落が紫上を中心とした春の御殿のあらまほしき有様を述べるのが中心であることからするならば、叙述の観点の相違する部分ともなる。尚、第一六文からも姫君についての叙述があるが、これは、春の御殿を構成する一員としてのものであるから、一連のものとして理解できる。

第二六文から第三八文までが、夏の御住居の段落である。一三の文によって構成されている。ここでは、最後の第三八文に「さもあることぞかし」とあり、ここが区切れとなっていることが明瞭に看取される。内容の点では、前半の花散里と後半の玉鬢とに分けられるが、二人はともに、夏、東北の町の、この時点における、主要人物である故、それぞれの御殿を源氏が回っていくという趣旨からするならば、一まとまりのものとして理解することが可能である。

展開の三段落目では、明石の御方に源氏が渡って行く。第三九文から第六五文にまで続いているのであるが、この段落の内容は、明石の方のことに限定されてはいない。第五二文からは「南の御殿」の意識が匂わされ、まだ夜深いうちに源氏は渡ってしまうとある。そして、第五七文からは、臨時の客の話となる。

この段落が、明石の方の話から説き起こされるにもかかわらず、このような様々な内容を含んだものとなってい

るのは、それだけ、賢明なる配慮なくしては保たれない、六条院における明石の方の地位の微妙さを示しているとも言えようか。この時の第一の人、紫上にとっては、もっとも気掛りな存在なのである。

また、臨時の客の話は、紫の上の許に帰ったところから、「今日は臨時客の事に紛らはして」と連続していく。即ち、臨時客の話は、終章の男踏歌とは違って、女性達を回った翌朝の出来事という扱いなのである。展開部分での叙述が女性達を中心としていることに合致した位置付けの仕方であろう。そして、いかなる人が参ろうと、源氏にかなう者はいないとして段落は区切られている。

さらに、この段落には、第六二文から第六六文までの補足の段落が存在する。これは「けり」によって規定されている段落であるが、若い上達部たちの玉鬘への懸想心がほのめかされているのが注目される。さらに、男性達の臨時客での様子が記されている。展開部分の叙述の中では性格の違う部分であり、補足段落に述べられるべき内容と言えよう。尚、「けり」によって規定される段落が「かし」によって包摂されるのは、次の資料四に示した、螢の巻に「けりかし」の文末形式があることからしても、十分可能なものであることが理解される。

〔資料四〕 「かかる児どちだに、いかにざれたりけむ。まるこそなほ例にしつべく、心のどけさは人に似ざりけれ」と聞え出で給へり。げに類多からぬ事どもは、好み集め給へりけりかし。(螢。第九八文・九九文)

六条院を一渡りした後は、日をおいて、源氏は二条東院の女性達を訪ねる。東院と末摘とした段落である。第六七文から第七七文までの一一文である。第六七文・第六八文で東院の女性達の生活の状況を述べた後に、その代表としての末摘花のもとを訪ねる場面が描かれる。唯一の取り柄であった髪もすっかり衰えてしまい、服装の着こなしも相変わらずである。しかし、それでも、源氏は「いとほしく悲しき人の様を」思っで見捨てないのだとして、

源語初音の表現構成

段落をまとめている。

次は「末摘と空蟬」とした段落である。第七八文から第九四文までの二七文である。同じ二条東院での話で前段から場面は続くのであるが、前段とはまた捉え方が違うようである。前段落が女性達の生活の状況を述べるのに重点があったのに対して、この段落では、第七八文から第八〇文まででは末摘花の気立の良さを述べ、以下、それに対する源氏の応対について述べるのである。即ち、ここでは、末摘花を始めとする、二条東院に住む人々の人柄とそれへの源氏の配慮を述べることに重点があると看做されるのである。そして、源氏が末摘花を揶揄する和歌を一人ごととところで、補足の段落に移る。

第八四文から第九四文までは、空蟬とのやりとりを中心とした、補足の段落である。空蟬は、源氏が覗いて見ても、昔通り「心ばせある」人となりである。会話の中では、第八八文のように源氏が昔の仕打ちをうらむ物言いもあるが、源氏にとっては、見放ちがたい存在なのである。それが何故に、補足の段落として、描かれることとなるのであろうか。これは、やはり、彼女が既に出家して仏門に入っていることにもよるかと思われる。初音の巻では、源氏とその女性達との関係を描写するのが、中心であるとするならば、出家した存在である空蟬は、いかに魅力あるにしても、既に一步離れた存在である。ただ、源氏の庇護を受ける一人として、描かれている。この補足段落も、第九四文の「けり」の文末表現によって規定されている段落ではあるが、「かし」の段落によって包摂されているのである。

第九五文から巻末の第一一六文までの二二文は、終章として六条院の栄華を改めて述べる段落であり、その中心は、男踏歌の行事である。第一〇二文から第一一一文まで、その六条院での様子の素晴らしさが書き連ねられる。

そして、翌日「日高く」なってから目覚めた源氏は、第一一五文で私の後宴をすべきことを言い、秘蔵の楽器を引き出している。勿論、女性の方々も、緊張して、心配りは準備おさおさ怠りなしである、というところで、巻は終わっているのである。

このように見ていくと、初音の巻では、「かし」の文末規定のある文によって、段落が区画されていることが看取されるであろう。それぞれの場面が描写された後に、「かし」の文が表れ、そこで段落が区切られる。そのような形式の繰り返しによって、初音の巻の段落構成が成されていると看做されるのである。

三

第二章では、「かし」の文末規定のある七つの文によって、初音の巻の段落構成が成されていることを述べた。続いて、ここでは、その七つの文の内容について検討してみたい。第一章でも触れたように、物語の地の文中での「かし」による文末規定のある文は、重層的な表現を担うものであった。主文脈の展開を補いながら、違った観点からの補足的な説明を行うものであった。

ところが、初音の巻では、「かし」の文によって巻を構成する段落それぞれが規定されているのである。となると、これらの「かし」の文の内容自体も、巻の中で重要な意味を持つものと考えられる。以下、七つの「かし」の文について、一例ずつ具体的に見ていくこととする。前章と同じく、表現構成資料を参照されたい。

巻冒頭の第一文は、「年立かへる朝の空の気色」から、年初の晴れやかな新春のあらまほしき自然の風情のあることと続いている。そして、ここで問題になるのは、「自ら人の心ものびらかに」と述べられる部分である。諸注

源語初音の表現構成

積では、いずれも「自然人の心ものんびりと」のように解されているのだが、これは「のびらかに」という語の意味からすると適切なものとは言えない。この解釈は「のどか」系の語に対応するものである。源氏物語中で、「のびらか」の語は、他に二例の使用例がある。次の資料五と六である。

〔資料五〕うちつぎて、あなかたは、と見ゆるものは御鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物と覚ゆ。あさましう高うのびらかに、先の方すこし垂りて、色づきたること、殊の外にうたてたり。（末摘花。第一三六文・一三七文・一三八文・一三九文）

〔資料六〕頭はつゆ草してことさらに色どりたらむ心地して、口つきうつくしうにほひ、まみのびらかに、はづかしう薫りたるなどは、なほいとよく思ひ出でらるれど、――以下略――（横笛。第二三文）

これらの例は、ともに「鼻」と「まみ」と、人間の顔の部分について説明したものである。資料五は、末摘花の鼻の様子を述べたもので、あきれ程高くのびた鼻とある。また、資料六は、幼い薫の顔つきで、目元が「のびらか」とある。この中では、資料五が理解しやすい例であろう。「普賢菩薩の乗物」象のような鼻というのであるから、長くすんなり伸びた鼻を説明していると考えられる。即ち、「のびらか」は、心理的に落ち着いた意味を表す「のどか」とは違って、何ら制限を受けることなく伸びた様子を描写する語と認められるのである。

このことは、当該の冒頭第一文の説明にも有効である。人の心も新春の自然と同様に「伸び伸びとした」状態にあると解される。そして、「まして」六条院の御殿の内ではどうかと続くのである。これは、六条院中の有様が単なる理想的なものであるだけではなく、その一方で、「御方々」の「のびらか」な故の心の確執のあることを表現しているのではなからうか。また、そのように理解することによって、他の六つの「かし」の文とも統一的に把握

可能となると考えるのである。

展開第一章の第一九文は、明石の御方から明石の姫君への贈物について述べたものである。第一八文にも「わざとがましく集めたる」とあって、続いて「思ふ心あらむかし」である。明石の姫君は今現在は紫上の養女の扱いであるが、実際の親は自分であるとの意識がこの贈物にも反映しているのではなからうか。

夏の御住居の段落では第三八文は、「さもある事ぞかし」という短い文である。ここでは「さ」の内容から考えなければならぬ。直前の第三七文では、源氏の親めいた以上の言い様に対して、玉鬘は「のたまはせむままだ」と応じている。源氏は彼女を親代りとなって養育しているのであるが、その態度は恋人のような面もあるとは直前の玉鬘の巻にも述べられている。それ故に、このような会話の応接もあるのだということにならう。両者の緊張関係といったものを反映している一文なのである。

第六一文は、臨時の客で六条院を訪れる、身分のある君達について述べる文である。彼らも諸道に通じているのだが、源氏の御前には圧倒されてしまうのが良くないことだとある。源氏の六条院世界というものがそれだけ他を圧して素晴らしいものであることを述べていることにはなるが、それを源氏を賛美する方向で表現しないで、なぜ他の者達を否定する形で表現しているのかが疑問である。栄華の絶頂にある六条院も、決して手離しで賛美される状況にないことを暗示している一文と言えよう。

第七七文は、源氏の末摘花への配慮を「あり難き」とする。末摘花のいたわしく悲しく感じさせる様子故、源氏は放って置けないのである。それをめったにありえないこととするのは、源氏の配慮を単に賛美しているのではない。末摘花の生活振りを評価はしないものの、気の毒さを感じる故に、せめて自分だけでもと致し方なく世話して

源語初音の表現構成

いるという述べ方をしているのである。

第八三文は、同じ末摘花についての記述である。相も変わらぬ人柄の朴訥さを揶揄するような歌を読んだことを、本人は聞き知っていなさらなかっただろうとしている。先の第七七文とも関連させて考えるならば、源氏が末摘花の世話を喜んでしているのではなく、多少呆れながらも責任感からしているのだと理解されよう。源氏自身そのような態度をほの見せているのである。この一文の内容も源氏を中心とした理想的な世界を賛美する方向のものとは言えないであろう。

巻末の第一一六文は、この巻のまとめとなる一文であるが、六条院の女性方の「私の後宴」へ「心懸想」を尽くしているであろうことを述べる。ここでも女性方は単にその準備をしているのではなく、「心懸想」とあるように緊張感をもって取り組んでいることになる。勿論、この後宴は六条院の栄華を表すものであるが、それを賛美すべき素晴らしきものという方向で述べるのではなく、準備への緊張感という形で述べるのがこの巻の表現意図を反映しているのである。

以上、七つの「かし」の文末規定のある文について、検討してきたのであるが、これらの文は、六条院中の有様を賛美するというよりは、その中での緊張感および内部に孕む様々な問題点を示しているものとして統一的に理解できるのである。初音の巻は、新春の描写にもかかわらず、めでたい一方の内容ではないという指摘もなされているのである。⁽³⁾

巻を構成する一つ一つの文を追うならば、その大部分は栄華を賛美するものと見ることができ。しかし、「かし」の文の内容はそのようなものではない。ということは、初音の巻では六条院のあらまほしき様を述べる部分

と、それを違った角度から批評する形の「かし」の文とで構成されていると言えよう。そして、巻の表現構成が「かし」によって明示されているのであるから、巻表現の基軸は「かし」によって成されていることになる。これから展開する六条院世界が栄華の中にも緊張感を以て形成されているものであることを示しているのである。

つまり、初音の巻の「かし」の文は、段落構成の区切れを示すだけでなく、その内容の点においても、巻表現に重層性を持たせて、六条院世界というものの問題性についても述べるといふ、二重の意味での役割を果たしているものとなる。この巻においては、「かし」の文末規定に注目すべきことが、改めて確認されたかと思量するのである。

四

以上のように、初音の巻の段落構成を見てきたのであるが、初音の巻の構成においては、終助詞「かし」の文末規定のある文が重要な役割を担い、この「かし」の文によって区画され規定されていることが明らかになったかと思ふ。

このことは、物語の表現方法の展開の上で、どのような意味を持つことになるのであろうか。物語文学の方法は、竹取物語以来助動詞「けり」の文末表現によって区画し規定されるものであった。そして、その方法は、源氏物語にも踏襲されており、桐壺の巻の「いづれの御時にか」から「すぐれてときめき給ふありけり」までの冒頭文はその流れを汲むものである。⁽⁴⁾

しかし、初音の巻の、「かし」の文末表現によって区画し規定される、表現構成は、その流れに反するものと言

源語初音の表現構成

えよう。先に触れた資料三の夕顔の例のように、物語文学の地の文では、「かし」の文末表現のある文は、物語の主軸の表現を補足的に説明するものであり、さらには、「けり」の文末表現のある文によって、包摂されるものである。それ故、この「かし」の文末表現の意味については、改めて、ここで検討する必要がある。

ただ、平安朝の仮名文学には、物語文学以外にも、日記文学という表現方法が存在する。この日記文学では、土佐日記以来蜻蛉日記他、非「けり」の文末表現によって、段落を区画し規定するという方法を用いている。その中では、「けり」の文末表現のある文は、非「けり」の文末表現によってなされる、主軸の表現を解説するための、副軸の表現ともいえる存在となっている。⁽⁵⁾

これを初音の巻に当て嵌めて考えるとどうであろうか。基本段落は、「かし」という非「けり」の文末によって区画されている。一方、「けり」によって規定される段落は、補助段落としての役割を持つのみで、「かし」段落によって、包摂されているのである。これはまさに、日記文学の方法に近いものである。源氏物語は、その表現方法の上でも、蜻蛉日記などの先行する日記文学の影響を多分に受けていることは、既に先学により指摘のなされているところであるが、⁽⁶⁾源氏物語の日記文学からの摂取は、その表現構成の方法にまで及んでいると言えるのである。

ところで、初音の巻での「けり」は、「かし」の段落によって包摂される、補足の段落にのみ存在するのではない。「かし」の段落の中にも「けり」による文末表現を持つ文は存在するのである。これら「かし」段落中の「けり」の文末表現のある文は、いかなる働きを有しているのであろうか。その点について、終章の「けり」の文三例にて検討を試みたい。

第九七文、第一〇〇文、第一〇九文がその例であるが、この三文はいずれも短い文であるという共通点がある。そして、文脈の中では、中心となる文ではなく、状況説明のような役割を果たしている文のようである。

まず、第九七文は、男踏歌の一行が、内裏・朱雀院から六条院へと巡って来るのであるが、それが、遅くなって夜明け方になってしまったことを述べる文である。ただ、文脈としては、この一文がなくとも第九六文から第九八文に自然に続いていくと読めるところである。

次の第一〇〇文は、女性の方々も局をしつらひて見物に出るのであるが、その折に玉鬘が南の殿に渡るついでに、紫上と姫君と対面を果たすというところである。これは、次の第一〇一文とも連続して理解すべきであろう。ただ、この二つの文によって表された内容は、男踏歌の盛華を描くこの段においては、やはり、補足的な説明とすべきである。丁度、その折に両者の対面があったことが、主文脈とはやや離れる形で、補足されているのみなのである。

三つ目の、第一〇九文は、女性達のこぼれ出た袖口の素晴らしさを述べる、第一〇八文からの続きである。そして、それが不思議なまで心を満たす見物であることを述べる。この文も、先の二つと同じく、状況の説明と看做すことができる。仮に、第一〇九文が存在しなくとも、文脈としては何ら支障のないところである。即ち、これらの「けり」は段落の中で挿入表現として機能し、重層的な表現を荷担するものなのである。

その他の「かし」段落中の「けり」の文末表現も、第一四文、第二八文等のように同様のものと考えられる。

これらの点から理解されるように、初音の巻での「けり」は、「かし」段落によって補助の段落として包摂されるか、もしくは「かし」段落の中で挿入表現として機能するかのどちらかである。そして、巻全体としては、「か

源語初音の表現構成

「し」によって、区画され規定されているのである。

ま と め

以上、検討してきたことから考えるならば、源氏物語全編の中での、初音の巻の位置付けについても新たな視点が見出されることになるのではなからうか。

先にも述べたように、「源氏物語の地の文中において、終助詞「かし」は、基本的に文脈の重層的表現を荷担する、挿入表現として存在するものであった。この事實は、初音の巻の性格を考えるにあたって、重要な手掛かりとなる。つまり、初音の巻自体が、源氏物語五十四帖の中で、挿入表現のような形で存在しているのではないかということである。事実、この巻では、新春の六条院や二条東院の女性達の描写、それに新年の行事の有様を述べることが中心であって特に事件といったものは存在しない。

以降の巻々で中心的な役割を果たす、玉鬘についても、ここでは未だ男達の懸想心が匂わされるのみで、実質的な展開は次の胡蝶の巻からとなる。物語中で、以前よりの懸案であった、春秋の争いも、胡蝶の巻に持ち越されている。要するに、初音の巻では、何らかの事件を描くことではなく、以降展開する物語の場としての、六条院の栄華の有様を、内部に孕む緊張感を匂わせつつ、描くことに重点がおかれているのである。

尚、これから物語の展開する、導入の部分に挿入表現の形で状況を規定するという方法は、源氏物語中では、決して、特別なものではない。各帖の冒頭における挿入表現は、奇異な事象ではなく、何よりも、桐壺の巻、冒頭部分、「いづれの御時にか」自体が既に挿入表現なのである。⁷⁾

- 註(1) 重松信弘『源氏物語の構想と鑑賞』(風間書房。昭和三七年八月)。桑原博史「源氏物語巻別の研究―初音」(『国文学解釈と教材の研究』第一巻六号。昭和四一年六月)。室伏信助「六条院の春―初音の巻の方法」(『講座源氏物語の世界』第五集。有斐閣。昭和五六年八月)。
- (2) 第一巻は第四三刷(昭和五六年三月)、第二巻は第二八刷(昭和五三年八月)、第三巻は二五刷(昭和五六年一〇月)、第四巻は第一七刷(昭和四七年九月)、第五巻は第一八刷(昭和五一年六月)、第六巻は第七刷(昭和三八年一二月)、第七巻は第一九刷(昭和五二年一〇月)をそれぞれ使用した。
- (3) 増田繁夫「春秋の争い―玉鬘・初音・胡蝶」(『国文学解釈と教材の研究』第三二巻一三三号。昭和六二年一二月)。
- (4) 塚原鉄雄『王朝の文学と方法』(風間書房。昭和三八年一月)。『王朝初期の散文構成』(笠間書院。昭和六二年六月)。
- (5) 塚原鉄雄「蜻蛉日記の方法」(『一冊の講座蜻蛉日記』。有精堂。昭和五六年四月)。『王朝初期の散文構成』(笠間書院。昭和六二年六月)。
- (6) 木村正中「日記文学から源氏物語へ」(『国文学解釈と教材の研究』第一七巻一五号。昭和四七年一二月)。
上村悦子「源氏物語と蜻蛉日記」(紫式部学会編。『源氏物語と女流日記・研究と資料・古代文学論叢第五輯』。昭和五一年一二月。武蔵野書院)。
- (7) 塚原鉄雄「挿入句―文章の重層」(『国文学解釈と教材の研究』第三二巻二号。昭和五二年一月)。

〔後記〕本稿は、平成元年一〇月の中古文学会秋期大会研究発表会において、口頭発表した際の草稿を修正加筆して成稿したものです。席上、また発表後、ご教示を賜った、室伏信助教授に、厚く御礼申し上げます。

源語初音の表現構成

初音の巻 表現構成資料

I 序章 新春六条院

①年立ちかへる朝の空の気色、名残なく曇らぬうららかなげさには、数ならぬ垣根の中だに、雪間の草若やかに色づきはじめ、いつしかと気色だつ霞に、木の芽もうちけぶり、自ら人の心ものびらかにぞ見ゆる^{かし}。②ましていとど玉を敷ける御前は、庭よりはじめ見所多く、磨きまし給へる、御方々のありさま、まねびたてむも言の葉足るまじくなむ。

II 展開

一 六条院

1 春殿の御前

③春のおとどの御前、とり分きて、梅の香も御簾の内のにほひに吹きまがひて、生ける仏の御国と覚ゆ。④さすがにうちとけて、やすらかに住みなし給へり。⑤侍ふ人々も、若やかにすぐれたるを、姫君の御方にと選らせ給ひて、すこし大人びたる限、なかなか由々しく、装束有様よりはじめて、めやすくもつけて、ここかしこに群れ居つつ、齒固の祝して、餅鏡をさへ取りよせて、千年のかげにしるき、年の内の祝事どもして、そぼれあへるに、大

臣の君さしのぞき給へれば、懐手ひきなほしつつ、いとはしたなきわざかなと詫び合へり。⑥「いとしたたかなる自らの祝事かな。皆おのおの思ふことの道々あらむかし。すこし聞かせよや。われことぶきせむ」とうち笑ひ給へる御有様を、年のはじめの榮に見奉る。⑦われはと思ひあがれる中将の君ぞ、「かねてぞ見ゆるなどこそ、鏡の影にもかたらひ侍りつれ。私の祈は、何ばかりの事をか」など聞ゆ。⑧朝の程は人々参りこみて、もの騒しかりけるを、夕つ方、御方々の参座し給はむとて、心ことに引き繕ひ、化粧じ給ふ御影こそ、げに見るかひあめれ。⑨「今朝この人々の戯れ交しつる、いとうらやましく見えつるを、上にはわれ見せ奉らむ」とて、乱れたることすこしうちませつつ、祝ひ聞え給ふ。⑩うす氷とけぬる池のかがみには世にたぐひなきかげぞならべる（和歌）⑪げにめでたき御あはひどもなり。⑫くもりなき池の鏡によるづ代をすむべきかげぞしるく見えける（和歌）⑬何事につけても、末遠き御契を、あらまほしく聞え交し給ふ。⑭今日は子の日なりけり。⑮げに千年の春をかけて祝はむに、道理なる日なり。⑯姫君の御方に渡り給へれば、童下仕など、御前の山の小松ひき遊ぶ。⑰若き人々の心地ども、おき所なくみゆ。⑱北のおとどより、わざとがましく集めたる髭籠ども、破子など奉れ給へり。⑲えならぬ五葉に、うつる鶯も、思ふ心あらむ^{かし}。

―補足段落―

⑳「年月をまつにひかれて経る人にけふうぐひすの初音きかせよ（和歌）音せぬさとの」と聞え給へるを、げにあらはれと思し知る。㉑言忌もえし給はぬ気色なり。㉒「この御返り、自ら聞え給へ。初音惜しみ給ふべき方にもあらずかし」とて、御硯取りまかなひ、書かせ奉らせ給ふ。㉓いとうつくしげにて、明暮見奉る人だに、飽かず思ひ聞ゆる御有様を、今までおぼつかなき年月の隔りけるも、罪えがましく心苦しと思す。㉔ひきわかれ年は経れども鶯

源語初音の表現構成

のすだちし松の根をわすれめや（和歌）^{②⑤}幼き御心にまかせて、くだくだしくぞある。

2 夏の御住居

^{②⑥}夏の御住居を見給へば、時ならぬけにや、いと静かに見えて、わざと好しきこともなく、あてやかに住みなし給へるけはひ見えわたる。^{②⑦}年月に添へて、御心の隔もなく、あはれなる御なからひなり。^{②⑧}今はあながちに近やかなる御有様も、もてなし聞え給はざりけり。^{②⑨}いと睦じくあり難からむ妹夫の契ばかり、聞え交し給ふ。^{③⑩}御几帳隔てたれど、すこし押しやり給へば、またさておはす。^{③⑪}縹はげににほひ多からぬあはひにて、御髪などもいたく盛り過ぎにけり、やさしき方にあらねど、えびかづらしてぞ繕ひ給ふべき、われならざらむ人は見ざめしぬ御有様を、かくて見るこそうれしく本意あれ、心軽き人の列にて、われに背き給ひなましかばなど、御対面の折々には、先づわが御心のながさをも、人の御心の重きをも、うれしく、思ふやうなりと思しけり。^{③⑫}こまやかにふる年の御物語など、なつかしく聞え給ひて、西の対へ渡り給ふ。^{③⑬}まだいたくも住み馴れ給はぬ程よりは、けはひをかしくしなして、をかしげなる童の姿なまめかしく、人かげあまたして、御しつらひあるべき限なれども、こまやかなる御調度は、いとしも整へ給はぬを、さる方にも清げに住みなし給へり。^{③⑭}正身も、あなをかしげ、と、ふと見え、山吹にもてはやし給へる御容貌など、いとほなやかに、ここぞ曇れると見ゆる所なく、隈なく匂ひきらきらしく、見まほしき様ぞし給へる。^{③⑮}物思に沈み給へる程のしわざにや、髪の裾すこし細りて、さはらかにかかれるしも、いともの清げに、此処彼処いとけざやかなる様ぞし給へるを、かくて見ざらましかばと思ほすにつけては、えしも見過し給ふまじくや。^{③⑯}かくいと隔なく見奉り馴れ給へど、なほ思ふに、へだたり多くあやしきが、現の心地もし給はねば、まほならずもてなし給へるもいとをかし。^{③⑰}「年頃になりぬる心地して、見奉るも心安く、本意か

なひぬるを、つつみなくもてなし給ひて、あなたなどにも渡り給へかし。いはけなき初事ならふ人もあめるを、もろともに聞きならし給へ。うしろめたく、あはつけき心もたる人なき所なり」と聞え給へば、「宣はせむままにこそは」と聞え給ふ。③⑧さもある事ぞかし。

3 明石の御方

③⑨暮方になる程に、明石の御方に渡り給ふ。④⑩近き渡殿の戸押しあくるより、御廉の中の追風、なまめかしく吹きにははして、物より殊にけだかく思さる。④⑪正身は見えず。④⑫いづらと見まはし給ふに、硯のあたりにぎははしく、草紙ども取り散したるを取りつつ見給ふ。④⑬唐の錦のことごととして縁さしたる褥に、をかしげなる琴うちおき、わざとめきよしある火桶に、侍従をくゆらかして、物ごとにしめたるに、衣被香のまがへる、いとえんなり。④⑭手習どもの乱れうちとけたるも、筋かはり、ゆゑある書きざまなり。④⑮ことごとしう草がちなどにもぎえがらず、めやすく書きすましたり。④⑯小松の御返を、めづらしと見けるままに、あはれなる故事ども書きまぜて、めづらしや花のねぐらに木づたひて谷のふる巢をとへる鶯(和歌)④⑰「声待ち出でたる」などもあり。④⑱「咲ける岡辺に家しあれば」など、ひき返しなぐさめたる筋など書きまぜつつあるを、取りて見給ひつつほほゑみ給へる、はづかしげなり。④⑲筆さしぬらして書きすさみ給ふ程に、ゐざり出でて、さすがに自らのもてなしは、かしこまりおきて、めやすき用意なるを、なほ人よりは異なりと思す。⑤⑰白きに、けざやかなる髪のかかりの、すこしさはらかなる程に薄らぎにけるも、いとどなまめかしさ添ひて、なつかしければ、新らしき年の御さわがれもや、とつつましかれど、こなたにとまり給ひぬ。⑤⑱なほおぼえ異なりかし、と方々に心おきておぼす。⑤⑲南のおとどには、ましてめざましがる人々あり。⑤⑳まだ曙の程に渡り給ひぬ。㉑かくしもあるまじき夜深さぞかし、と思ふに、名残もただ

源語初音の表現構成

ならずあはれに思ふ。⑤⑤待ちとり給へるはた、なまけやけしと思すべかめる心の中はかられ給ひて、「あやしき転寝をして、若々しかりけるいぎたなさを、さしもおどろかし給はで」と、御気色とり給ふもをかしく見ゆ。⑤⑥ことなる御答もなければ、わづらはしくて、空寝をしつつ、日高く大殿籠りおきたり。⑤⑦今日は臨時客の事に紛らはしてぞ、おもがくし給ふ。⑤⑧上達部親王達など、例の残るなく参り給へり。⑤⑨御遊ありて、引出物禄など、二なし。⑥⑩そこらつどひ給へるが、われも劣らじともてなし給へる中にも、すこし准ひなるだに見え給はぬものかな。⑥⑪とり放ちては、有職多くものし給ふ頃なれど、御前にてはけおされ給ふ、わろし^かし。

―補足段落―

⑥②何の数ならぬ下部などに、この院に参るには、心づかひことなりけり。⑥③まして若やかなる上達部などは、思ふ心などものし給ひて、すずろに心懸想し給ひつつ、常の年よりも異なり。⑥④花の香さそふ夕風、のどかにうち吹きたるに、御前の梅やうやうひもときて、あれは誰時なるに、物のしらべども面白く、「この殿」うち出でたる拍子、いとはなやかなり。⑥⑤大臣も時々声うち添へ給へる福草の末つ方、いとなつかしうめでたく聞ゆ。⑥⑥何事も、さし答し給ふ御光にはやさされて、色をも香をもますけぢめ、ことになむ分れける。

二 二条院東院

1 東院と末摘

⑥⑦かくののしる馬車の音をも、物隔てて聞き給ふ御方々は、蓮の中の世界にまだ開けざらむ心地もかくや、と心やましげなり。⑥⑧まして、東の院に、離れ給へる御方々は、年月に添へて、つれづれの数のみまされど、世のうきめ

見えぬ山路に思ひ准へて、つれなき人の御心をば、何とかは見奉りとがめむ、その外の心もとなく淋しきこと、はたなければ、行の方の人は、そのまぎれなく勤め、仮名のよろづの草子の学問、心に入れ給はむ人は、またその願に従ひ、ものまめやかにはかばかしき掟にも、ただ心の願ひに従ひたる住ひなり。⑥⑨さわがしき日頃過して渡り給へり。⑦⑩常陸の宮の御方は、人の程あれば、心苦しう思ひて、人目のかざりばかりは、いとよくもてなし聞え給ふ。⑦⑪いにしへ盛と見えし御若髪も、年頃に衰へゆき、まして滝のよどみはづかしげなる御かたはらめなどを、いとほしと思せば、まほにも向ひ給はず。⑦⑫柳はげにこそすさまじかりけれと見ゆるも、着なし給へる人がらなるべし。⑦⑬光りもなく黒き搔練の、さるさるしく張りたる一襲、さる織物の袷を着給へる、寒げに心苦し。⑦⑭かさねの袷などは、いかにしなしたるにかあらむ。⑦⑮御鼻の色ばかり、霞にも紛るまじくはなやかなるに、御心にもあらずうち歎かれ給ひて、ことさらに御几帳引き繕ひ隔て給ふ。⑦⑯なかなか女はさしも思したらず、今はかくあはれに長き御心の程を隠しきものに、うちとけ頼み聞え給へる御様あはれなり。⑦⑰かかる方にも、おしなべての人ならず、いとほしく悲しき人の御さまと思せば、あはれに、われだにこそは、と、御心とどめ給へるもあり難きぞ^{かし}。

2 末摘と空蟬

⑦⑱御声もいと寒げに、打ちわななきつつ語ひ聞え給ふ。⑦⑲見わづらひ給ひて、「御衣ものなど、御後見聞ゆる人は侍りや。かく心やすき御住は、ただいとうちとけたるさまに、ふくみなえたるこそよけれ。うはべばかり繕ひたる御装は、あいなく」など聞え給へば、こちごちしくさすがに笑ひ給ひて、「醍醐の阿闍梨の君の御あつかひ侍るとて、衣どももえ縫ひ侍らでなむ。裘をさへとられにし後、寒く侍る」と聞え給ふは、いと鼻赤き御兄なりけり。⑧⑰心うつくしといひながら、あまりうちとけ過ぎたりと思せど、ここにてはいとまめにきすぐの人にておはす。

源語初音の表現構成

⑧1「裘はいとよし。山伏の蓑代表にゆづり給ひてあへなむ。さてこのいたはりなき白妙の衣は、七重にもなどか重ね給はざらむ。さるべき折々は、うち忘れたらむことも驚かし給へかし。もとよりおれおれしく、たゆき心のおこたりに、まして方々の紛はしききほひにも、自らなむ」と宣ひて、向の院の御倉あけさせて、絹綾など奉らせ給ふ。⑧2荒れたる所もなけれど、住み給はぬ所のけはひ静かにて、御前の木立ばかりぞいと面白く、紅梅の咲き出でたるにほひなど、見はやす人もなきを見渡し給ひて、ふるさとの春の木末にたづね来て世のつねならぬ花を見るかな(和歌)⑧3ひとりごち給へど、聞き知り給はざりけむかし。

— 補足段落 —

⑧4空蟬の尼衣にも、さしのぞき給へり。⑧5うけばりたる様にはあらず、かごやかに局住にしなして、仏ばかりに所えさせ奉りて、行ひ勤めけるさまあはれに見えて、経、仏の飾、はかなくしたる鬘伽の具なども、をかしげになまめかしく、なほ心ばせありと見ゆる人のけはひなり。⑧6青鈍の几帳、心ばへをかしきに、いたく居隠れて、袖口ばかりぞ色黒なるしもなつかしければ、涙ぐみ給ひて、「松が浦島を遙かに思ひてぞ、止みぬべかりける昔より心憂かりける御契かな。さすがにかばかりの睦は、絶ゆまじかりけるよ」など宣ふ。⑧7尼君も、ものあはれなるけはひにて、「かかる方に頼み聞えさするしもなむ、浅くはあらず思ひ給へ知られ侍りける」と聞ゆ。⑧8「つらき折々重ねて、心惑し給ひし世の報などを、と仏にかしこまり聞ゆるこそ苦しけれ。思し知るや。かくいとすなほにしもあらぬものを、と思ひ合せ給ふ事も、あらじやはとなむ思ふ」と宣ふ。⑧9かのあさましかりし世の故事を、聞き置き給へるなめりとはづかしく、「かかる有様を御覧じはてらるるより外の報は、何処にか侍らむ」とて、まことにうち泣きぬ。⑨0いにしへよりも、物深くはづかしげさまさりて、かくもて離れたる事と思すしも、見放ち難く思さる

れど、はかなき事を宣ひ掛くべくもあらず、大方の昔今の物語をし給ひて、かばかりのいふかひだにあれかし、と、あなたを見やり給ふ。⑨①かやうにても、御蔭に隠れたる人々多かり。⑨②皆さしのぞき渡し給ひて、「おぼつかなき日数つもる折々あれど、心の中はおこたらずなむ。ただ限ある道の別のみこそうしろめたけれ。命ぞ知らぬ」など、なつかしく宣ふ。⑨③何れをも程々につけて、あはれと思したり。⑨④われはと思しあがりぬべき御身の程なれど、さしも事々しくもてなし給はず、所につけ人の程につけつつ、あまねくなつかしくおはしませば、ただかばかりの御心にかかりてなむ、多くの人々年を経ける。

Ⅲ 終章 六条院栄華

⑨⑤今年は男踏歌あり。⑨⑥内裏より朱雀院に参りて、次にこの院に参る。⑨⑦道の程遠くて、夜、明方になりけり。⑨⑧月の曇なく澄みまさりて、薄雪すこし降れる庭のえならぬに、殿上人など、ものの上手多かる頃ほひにて、笛の音もいと面白く吹き立てて、この御前はことに心づかひしたり。⑨⑨御方々も物見に渡り給ふべく、かねて御消息どもありければ、左右の対、渡殿などに、御局しつつかおはす。⑩⑩西の対の姫君は、寝殿の南の御方に渡り給ひて、こなたの姫君、御対面ありけり。⑩⑪上も一処におはしませば、御几帳ばかり隔てて聞え給ふ。⑩⑫朱雀院の後の宮の御方など廻りける程に、夜もやうやう明け行けば、水駅にてこそがせ給ふべきを、例あることよりほかに、さまざまにこと加へて、いみじくもてはやさせ給ふ。⑩⑬影すさまじき暁月夜に、雪はやうやう降りつむ。⑩⑭松風木高く吹きおろし、ものすさまじくもありぬべき程に、青色のなえばめるに、白襲の色あひ、何の飾かは見ゆる。⑩⑮挿頭の綿は、にほひもなきものなれど、所がらにや面白く、心ゆき、命延ぶる程なり。⑩⑯殿の中將の君、内の大殿の君達、

源語初音の表現構成

そこらにすぐれてめやすくはなやかなり。⑩ほのぼのと明け行くに、雪やや散りて、そぞろ寒きに、竹河謡ひて、かよれる姿、なつかしき声々の、絵にも画きとどめ難からむこそ口惜しけれ。⑪御方々、何れも劣らぬ袖口ども、こぼれ出でたるこちたさ、物の色あひなども、曙の空に春の錦立ち出でにける霞の内かと思渡さる。⑫あやしく心ゆく見物にぞありける。⑬さるは高巾子の世離れたるさま、寿詞のみだりがはしき、嗚呼めきたることもことごとしくとりなしたる、なかなか何ばかりの面白かるべき拍子も聞えぬものを。⑭例の綿かづきて渡りて罷でぬ。⑮夜明け果てぬれば、御方々帰り渡り給ひぬ。⑯大臣の君、すこし大殿籠りて、日高く起き給へり。⑰「中将の声は、弁の少将にをさをさ劣らざるは。あやしく有職ども生ひ出づる頃ほひにこそあれ。いにしへの人は、まことに賢き方やすぐれたる事も多かりけむ、情だちたる筋は、この頃の人にえしもまさらざりけむかし。中将などをば、すくなくしき公人にしなしてむと思ひおきてし。自らのあざればみたるかたくなしさを、もて離れよと思ひしかど、なほしたにはほのすきたる筋の心をこそとどむべかめれ。もてしづめ、すくよかなるうはべばかりは、うるさかめり」など、いとうつくしと思したり。⑱万春楽、御口ずさみに宣ひて、「人々のこなたにつどひ給へるついでに、いかでももの音こころみてしがな。私の後宴すべし」と宣ひて、御琴どもの、うるはしき袋どもして秘めおかせ給へる、皆引き出でて、おしのごひて、ゆるべる緒整へさせ給ひなす。⑲御方々、心づかひいたくしつ、心げさうをつくし給ふらむかし。